

## 特別展示「八十塚古墳群の時代～武庫平野における群集墳の成立と展開～」

山田暁（当館学芸員）

### はじめに

八十塚古墳群は、西宮市苦楽園四番町・苦楽園五番町・苦楽園六番町と芦屋市六麓荘町・岩園町・朝日ヶ丘町に分布する古墳時代後期から飛鳥時代（6世紀後半～7世紀）にかけて造営された群集墳である。群集墳は、古墳時代後期から造営が開始され、横穴式石室(図1)を埋葬施設として構築するとともに、丘陵や山麓のような集落が営まれないところに造営されることが多い[安村2008]。また、規模の小さな古墳が一定の範囲に複数築造されていることが特徴である[西宮市立郷土資料館1994]。

八十塚古墳群は、古墳の分布状況から朝日ヶ丘支群・岩ヶ平支群・剣谷支群・老松支群・苦楽園支群の5つの支群（グループ）に分類される西摂地域を代表する群集墳である(図2)。

近年、八十塚古墳群の発掘調査や八十塚古墳群終焉後に営まれる遺跡の発掘調査が西宮市において増加した。そこで、今回の特別展示では、八十塚古墳群と周辺の後期古墳から出土した副葬品を御覧いただくとともに、武庫平野における群集墳の成立から終焉、次の時代への変遷について紹介したい。

### 1. 八十塚古墳群の調査契機

享保19年（1734）に編纂された『摂津志』に「打出村西岩平、山中有数塚曰八十冢」とあり、八十塚古墳群の記載がある。そのため、江戸時代には一般に知られていたと考えられる。

住宅地として開発され始めたことで、数多くの発掘調査が行われ始めた。昭和31年（1956）に造園にともなう土取作業中に陶棺の破片が出土したことを契機として、芦屋市教育委員会が緊急調査を実施した。調査結果によると、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が2基（岩ヶ平支群第1・2号墳）確認され、須恵器や土師器が

出土した[芦屋市教委1959]。陶棺については、芦屋市立美術博物館において復元し展示されている。

## 2. 西宮市域における八十塚古墳群発掘調査史

西宮市域における八十塚古墳群の調査は、昭和40年（1965）に苦楽園支群第1・2号墳の発掘調査を実施したことに始まる。苦楽園支群第1・2号墳は、無袖式の横穴式石室が同一墳丘中に2基、7世紀に構築されていた(写真1)。この古墳は、先に築造された第1号墳を改造して、第2号墳の横穴式石室と墳丘を付加させていた。このような1墳丘内に2つの別々の横穴式石室が構築される例は少ない[西宮市1967・西宮市教委1967]。なお、苦楽園支群第1・2号墳は発掘調査終了後、西宮市立大社中学校に移築されて保存されている。

昭和49～52年（1974～1977）において苦楽園支群第5・6・7号墳及び、老松支群第3号墳、剣谷支群第2号墳の学術調査を西宮市教育委員会が実施した。この調査は、開発事業による古墳の破壊を危惧し、古墳の遺存状況の確認、保存を行うことを目的として実施した。

苦楽園支群第5・6・7号墳は、それぞれ20m規模の円墳で無袖式の横穴式石室を埋葬施設としていた。須恵器や鉄釘が出土しており、7世紀に築造されたと考えられた[西宮市教委1978]。その後、平成22年（2010）に現地保存されていた苦楽園支群第5・6・7号墳は開発事業に起因する再発掘が行われ、記録保存することとなった(写真2、図3)。また、築造順序は出土した須恵器から考えると、7号墳→6号墳→5号墳の順序で築造されたと推定されている[西宮市教委2014]。

老松支群第3号墳は、墳丘規模13～14mの円墳で、右片袖式の横穴式石室を埋葬施設としている(写真3)。また、横穴式石室の床面には排水溝が構築されていた。出土遺物は、須恵器・土師器・銀環・刀子・鉄釘・石器が出土しており、6世紀後半に築造されたと考えられる[西宮市教委1978]。この調査成果により、昭和56年（1981）に老松支群第3号墳は「西宮市指定史跡 老松古墳」となった。その後、平成8年（1996）に墳丘の範囲確認調査を実施し、墳丘規模が10m×9mと推定された[西宮市教委2000](図5)。

剣谷支群第2号墳は、墳丘規模10mの円墳で、横穴式石室を埋葬施設としている(写真4)。袖の形態については不明である。遺物は、須恵器・土師器が出土しており、6世紀後半に築造されたと考えられる[西宮市教委1978]。平成元年（1989）に開発事業によって、現地保存されていた剣谷支群第2号墳を再発掘し、記録保存することとなった。再調査の結果、横穴式石室左側壁の基底石の1石に箭穴（やあな）があることが明らかになった。箭穴技法は、横穴式石室の石材を母岩より割る際に使用される技法で、列状に一定の間隔で石に穴（箭穴）を穿ち、楔状の道具を箭穴に入れて、槌等で楔状の道具を叩き、石材を割る。現在この石材は西宮市教育文化センター内に保存されている[西宮市教委1991]。

平成6年（1994）には、老松支群第4号墳においても開発事業にともなう発掘調査を実施した。発掘調査の結果、墳丘規模5.2m×6.4mの楕円形墳で、無袖式の横穴式石室を埋葬施設としていることが判明した(写真5)。遺物は、須恵器1点が出土しており、7世紀に築造されたと考えられる[西宮市教委2000]。

以上、西宮市域における八十塚古墳群の発掘調査を振り返った。なお八十塚古墳群の墳丘及び横穴式石室、出土遺物(写真6)については表1にまとめたので参照いただきたい。

### 3. 八十塚古墳群の成立と展開

八十塚古墳群は、古墳時代後期後半（6世紀後半：須恵器編年TK43型式期）から朝日ヶ丘支群より、築造され始める[森岡1979]。その後、老松支群・岩ヶ平支群・剣谷支群、最後に苦楽園支群で造墓活動が行われ、飛鳥時代前半（7世紀前半）をもって八十塚古墳群の造営は終了すると考えられている(図4)。芦屋市域に至っては、西宮市域よりもやや早い時期から造墓活動を行うが、同じく飛鳥時代前半まで造墓活動が行われ、ほぼ同時に造営を終了する。

埋葬施設は、須恵器編年TK43型式期とTK209型式期（6世紀後半～末）において、両袖式もしくは片袖式の横穴式石室を構築しているが、TK217型式期（7世紀前半）の古墳の埋葬施設は、無袖式の横穴式石室を構築している。つまり、古墳時代後期後半は両袖式や片袖式の横穴式石室を構築するが、飛鳥時代になると、埋葬施設が簡略化し、無袖式の横穴式石室が中心になる。これは、同一古墳群内での造墓活動を小規模化し[直宮2002]、古墳築造の省力化が進んだことを表している。

出土遺物については、岩ヶ平支群61号墳のように双龍環頭大刀（装飾付大刀）が副葬されている場合もあるが、須恵器や土師器、金環などが多い。

このように、埋葬施設が簡略化する流れや、副葬品の内容などは支群間においてほぼ同一で、均質的である。そのため各支群の古墳造営集団は、相互に古墳築造の情報を共有していると考えられる。

### 4. 八十塚古墳群の終焉

先のように、飛鳥時代前半（7世紀前半）において、八十塚古墳群は造墓活動を終了する。西宮市域では、飛鳥時代後半以降、古墳を造営することはなくなり、高畑町遺跡（西宮市深津町）と津門大塚町遺跡（西宮市津門大塚町）を中心に大きな集落が形成されたことが近年の発掘調査の成果で確認された。

高畑町遺跡からは、奈良時代の大型井戸(写真7)が検出された。井戸内部には、和同開珎や木簡(写真8)など奈良時代の遺物が出土した。また、津門大塚町遺跡からは、掘立柱建物(写真9)が検出され、柱穴からは奈良時代の須恵器が出土している。また、同遺跡では、重圈文軒丸瓦(写真10)が出土していることから、周辺に瓦

表1 八十塚古墳群における属性

支群	古墳名	墳形	市域	墳丘規模	石室袖形態
岩ヶ平支群	第1号墳	円墳	芦屋市	18m	両袖式
	第2号墳	円墳		15m	-
	第3号墳	円墳		12~20m	右片袖式
	第5号墳	円墳		15m	左片袖式
	第6号墳	円墳		9m	無袖式
	第7号墳	円墳		12m	右片袖式
	第8号墳	円墳		16m	両袖式
	第10号墳	円墳		10.5~13m	右片袖式
	第16号墳	円墳		12~18m	左片袖式
	第17号墳	円墳		8~12m	無袖式
	第19号墳	円墳		10~11m	右片袖式
	第22号墳	円墳		16m	右片袖式
	第23号墳	円墳		7~7.6m	無袖式
	第24号墳	円墳or方墳		7~7.5m	無袖式
	第26号墳	-		-	右片袖式
	第28号墳	-		-	無袖式
	第29号墳	円墳		15m	-
	第45号墳	円墳		10~16m	-
	第46号墳	円墳		12m	右片袖式
	第50号墳	円墳		8m	無袖式
	第52号墳	方墳		5.8m×7.4m	無袖式
	第53号墳	円墳		5.37~9.45m	無袖式
	第54号墳	円墳		15m	無袖式
第55号墳	円墳	3.25~5.73m	無袖式		
第56号墳	-	-	竪穴系小石室		
第57号墳	-	-	-		
第58号墳	円墳	14m	両袖式or右片袖式		
第60号墳	円墳	8~9m	無袖式		
第61号墳	円墳	8~12m	無袖式		
朝日ヶ丘支群	第1号墳	-	-	-	右片袖式
	第2号墳	-	-	-	-
剣谷支群	第1号墳	円墳	-	-	-
	第2号墳	円墳	10m	-	-
老松支群	第3号墳	円墳	9~10m	右片袖式	
	第4号墳	円墳	5.2~6.4m	無袖式	
苦楽園支群	第1号墳	円墳	西宮市	11m	無袖式
	第2号墳	円墳			無袖式
	第5号墳	円墳		7.2~10.3m	無袖式
	第6号墳	円墳		15m	無袖式
	第7号墳	円墳	14m	無袖式	

石室規模（全長×最大幅×高さ）	出土遺物	須恵器編年
8.2m×1.8m×2.0m（残）	須恵器、土師器、銀環、ガラス小玉、刀子、鉄釘、陶棺	TK43・TK217
5.1m（残）×1.8m×1.6m（残）	須恵器、土師器、銀環、紡錘車、鉄釘、石鏃	TK209
9m×1.8m×2.0m（残）	須恵器、土師器、銀環、白玉、管玉、直刀、鉄釘	TK209・TK217
6.9m×1.7m×2.0m（残）	須恵器、耳環、紡錘車、鉄釘	TK43・TK209・TK217
5.4m×1.1m×-	須恵器、土師器	TK217
7.8m×1.6m×-	須恵器、耳環、勾玉	TK43・TK209・TK217
9.9m×1.9m×-	須恵器	TK209・TK217
7.1m×1.5m×0.85m（残）	須恵器	TK43・TK209・TK217
7.8m×1.78m×2.1m（残）	須恵器、土師器、耳環、馬具、鉄釘	TK43・TK209・TK217
5.5m×1.2m×1.28m（残）	須恵器、土師器、鉄釘	TK217
6.9m×1.35m×2.1m（残）	須恵器、土師器、耳環、鉄鏃、鉄釘	TK209
9.54m×1.55m×-	須恵器、耳環、鉄釘	TK209・TK217
3.08m×1.02m×0.65m（残）	須恵器、土師器、耳環	-
4.35m×0.89m×0.76m（残）	須恵器、土師器、鉄釘、耳環、石鏃	TK217
7.0m以上×-×-	須恵器、土師器、鉄鏃、鉄釘、耳環	TK43・TK209
4.4m×1.1m×-	須恵器	TK43・TK209
3.3m（残）×1.75m×1.04m	須恵器、土師器、耳環、ガラス小玉、鉄釘	TK209・TK217
8.5m×1.7m×-	須恵器	TK217
4.5m以上×1.6m×1.4m（残）	須恵器	-
5.02m×0.905m×1.04m（残）	須恵器、鉄釘、針金、石鏃	TK209
3.68m×1.14m×1.14m（残）	須恵器、鉄釘、針金、石鏃	TK217
4.83m×1.05m×0.81m（残）	須恵器、土師器、耳環、鉄釘	TK217
5.75m×1.14m×0.9m（残）	須恵器、土師器	TK217
2.22m×0.7m×0.56m（残）	須恵器、土師器	TK217
1.59m×0.45m×0.63m（残）	-	-
4.5m以上×0.85m以上×1.2m（残）	鉄鏃	-
9.1m以上×1.7m×1.05m（残）	須恵器、耳環、管玉、切子玉、棗玉、鉄鏃、鉄釘、	TK43・TK209・TK217
5.8m以上×1.08m×0.88m（残）	須恵器、耳環、鉄釘	TK209・TK217
5.48m以上×1.06m×0.97m（残）	須恵器、鉄刀、両頭金具、鉄釘、双龍環頭大刀柄頭、鞘金具	TK209
6.1m×1.9m×0.8m（残）	須恵器、土師器、刀子、鉄釘、ガラス小玉	-
7.0m×1.7m×0.8m（残）	須恵器、土師器、耳環、鉄釘	TK43
-×1.5m×-	須恵器、土師器、鉄釘	TK217
2.7m以上×1.4m×1.35m（残）	須恵器、土師器	TK209
6.34m×1.4m×2.04m	須恵器、銀環、鉄釘、刀子	TK209
5.38m×1.37m×0.8m（残）	須恵器	TK217
5.3m×1.2m×1.4m（残）	須恵器、土師器、鉄釘	TK217
4.9m×1.2m×1.4m（残）	須恵器、土師器、金環、鉄釘	TK217
6.2m×1.1m×1.1m（残）	須恵器、金環、鉄釘	TK217
3.2m以上×1.15m×0.95m（残）	須恵器、鉄釘	TK217
5.4m以上×1.07m×1.27m（残）	須恵器、金環、鉄釘	TK217

が葺かれるような建物があったことが推定されている。さらには、平安時代の掘立柱建物も確認されており、建物周辺では、緑釉陶器が出土している[大手前大学史学研究所・西宮市教委2018](写真11)。

このように、古墳時代～飛鳥時代前半まで中心的モニュメントであった古墳が築造されなくなり、高畑町・津門大塚町遺跡を中心とする集落の造営に変化していく。

## まとめ

以上のように、八十塚古墳群の成立から終焉、次の時代への変遷について紹介してきた。今回の特別展示は、このような古墳時代後期から奈良時代の社会の移り変わりの流れに沿った展示を行った。古代の西宮における古墳を中心とした社会の終わり、律令社会への変化をみていただきたい。

## 引用文献

芦屋市教育委員会 1959 『芦屋市文化財調査報告』第1集

大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会 2018 『新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡―浮かびあがる武庫郡の中心』

直宮憲一 2002 「西摂における群集墳の築造とその展開―八十塚古墳群と長尾山丘陵の古墳群の比較を中心に―」 『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究第7冊 関西大学文学部考古学研究室

西宮市 1967 『西宮市史』第7巻資料編4

西宮市教育委員会 1967 『苦楽園五番町古墳』

西宮市教育委員会 1978 『苦楽園の古墳』西宮市文化財調査報告書第2集

西宮市教育委員会 1991 『八十塚古墳群剣谷支群第2号墳第2次発掘調査報告書』西宮市文化財資料第34号

西宮市教育委員会 2000 『西宮市埋蔵文化財発掘調査報告書』西宮市文化財資料第44集

西宮市教育委員会 2014 『八十塚古墳群苦楽園支群第5・6・7号墳発掘調査報告書』西宮市文化財資料第60集

西宮市立郷土資料館 1994 『八十塚発掘～38年間にわたる群集墳発掘調査の成果～』西宮市立郷土資料館第9回特別展展示案内図録

森岡秀人 1979 「総括―八十塚古墳群の展開と岩ヶ平支群のもつ意義―」 『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』芦屋市教育委員会

安村俊史 2008 『群集墳と終末期古墳の研究』清文堂

写真8・10・11については大手前大学史学研究所より提供。



写真1 苦楽園支群第1・2号墳の2基の石室



写真2 苦楽園支群第5号墳横穴式石室 (平成22年)



写真3 老松支群第3号墳



写真4 剣谷支群第2号墳横穴式石室



写真5 老松支群第4号墳横穴式石室



写真6 西宮市域の八十塚古墳群出土遺物



写真7 高畑町遺跡検出大型井戸 (奈良時代)



写真8 高畑町遺跡出土木簡



写真9 津門大塚町遺跡検出奈良時代掘立柱建物



写真10 津門大塚町遺跡出土重圏文軒丸瓦



写真11 津門大塚町遺跡出土緑釉陶器

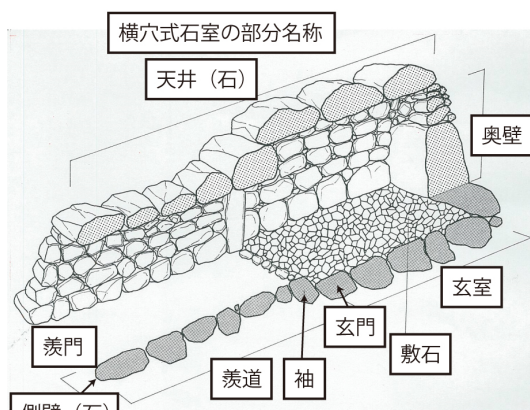


図1 横穴式石室の構造名称

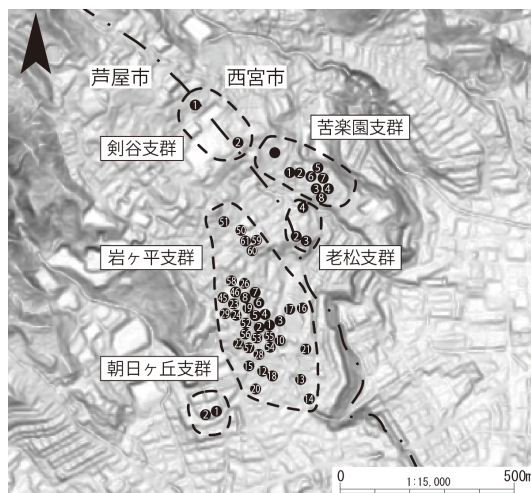


図2 八十塚古墳群分布図

古墳群等の名称	6 世 紀		7 世 紀	
	前 半	後 半	前 半	後 半
八十塚古墳群旭ヶ丘支群		.....		
〃 岩ヶ平支群		————	————	
〃 老松町支群		————	.....	
〃 苦楽園支群		————	————	
〃 剣谷支群		————	.....	

[注] ———造墓期 ……追葬期

(森岡秀人「総括—八十塚古墳群の展開と岩ヶ平支群のもつ意義—」『芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群10号墳の調査』芦屋市教育委員会 1979年より一部改変)

図4 八十塚古墳群における造墓と追葬期間 (直宮2002)

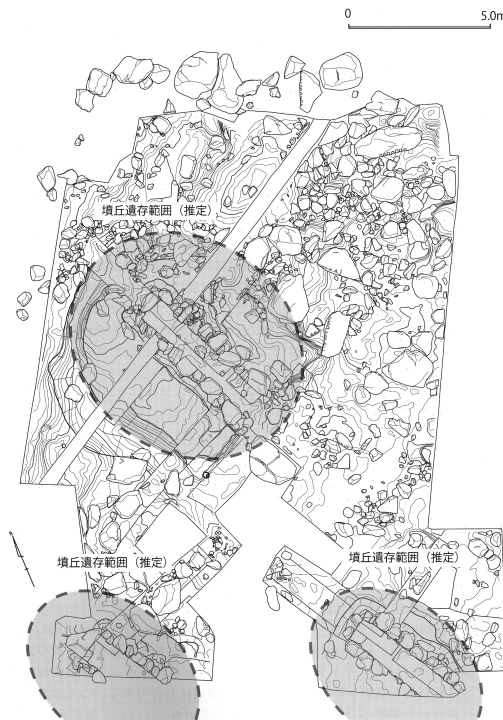


図3 苦楽園支群第5・6・7号墳の墳丘想定図 (西宮市教委2014)

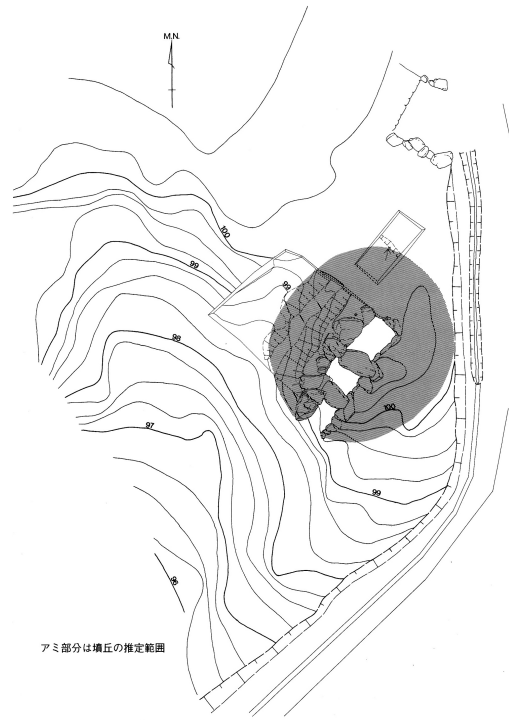


図5 老松支群第3号墳(老松古墳)の墳丘想定図 (西宮市教委2000)

寄贈資料一覧 (平成30年6月現在、敬称略)

這子人形1点 (西川澄子)

ご寄贈ありがとうございました。

目次

CONTENTS

特別展示「八十塚古墳群の時代～武庫平野における群集墳の成立と展開～」(山田暁) …1  
寄贈資料一覧… 8

西宮市立郷土資料館ニュース第49号 平成30年(2018年)7月14日